

アジ研流  
読書案内

—研究者が薦める3冊

## 道を失っても迷うことはできない

相沢 伸広

ここでは研究分野の代表作ではなく、研究方法を模索するにあたって恩をうけた三冊の紹介にとどめることを御赦し頂きたい。

一九九八年五月、前年から始まっていたスハルト政権打倒運動も、勝負の時を迎えていた。ジャカルタやメダンをはじめ、インドネシア各地の街は荒れていた。学生デモに軍が発砲し、死者が出た。経済危機で物価が高騰する中で、小売店やショッピングセンターに火が放たれ、閉じ込められた者は建物もろとも焼失した。華人女性に対する組織的なレイプ事件が恐怖を呼び、略奪が頻発した。

新聞やテレビを通じて伝わる遠くの出来事に、当時大学生の私も「なぜ」と問うていた。世界中で共有されていたであろうその間い

には、予想以上に多様な答えが用意されていた。例えば、群集心理

による一時の狂乱である、インドネシア特有の歴史の必然である、国軍の中での権力闘争、陰謀である、スハルト政権延命のためのマツチポンプである、さらには、そもそも事実誤認のセンセーショナルリズムであり、華人自らのでっちあげ、誇大な喧伝である、等々。

Capote, Truman. *In Cold Blood*.

New York: Random House.

1965. (邦題『冷血』)はアメリカ・

カンザス州の田舎町でおきた、ある殺人事件を扱った小説である。

一般に、殺人事件ほど誰もが「なぜ」との疑問を共有し、にもかかわらず一様の答えが得られないものはないかもしれない。立場ごとに複数の真実が並存することは、

暴動やジェノサイド、といった「歴史的な」殺人行為にしても似たと

ころがある。

私はインドネシアの暴動に対する「なぜ」に関心を持ち、調べ始めたものの、甲乙つけがたい説明をいくつも並べるだけで、一向に理解は深められず、この問題を研究テーマに選んだことを半ば後悔していた。

殺人事件を扱った小説は数知れない。しかし、大学時代に友人に勧められて読んだカポーターの『冷血』は、少し違っていた。誰が殺したのかは、はじめから読者には明かされている。殺した者、殺された者、事件を調べる者、報

じる者のそれぞれの物語が交差しながら物語は展開する。この本で、著者カポーターは殺人事件の謎を解くのではなく、殺人事件を通じて、事件が起きなければ決して交

わることのなかったいくつもの世界が同居していることを描いた。

彼は、殺人を問いとしてではなく、異なる世界の結び目として扱っていた。

インドネシアでなぜ暴動が起きたのか？という原因追求型の問いに拘泥していた私に、『冷血』は異なる研究上の道標を示した。それは、「殺し」をきっかけに、普段は現れない複数の世界の交わりを描くことであり、事件を理解することとは多様なだけでなく、多重的な構造を成す社会としてインドネシアの理解を求め、大きな道標であった。

殺し（暗殺、処刑、紛争、戦争、ジェノサイド）の原因を問うことは、政治学、歴史学でもっとも重要なテーマのひとつであると同時に明確な説明が最も困難なテーマのひとつでもある。そんな殺しの問題を扱う時、『冷血』は以来必ず立ち返る書となった。

もっとも、これで研究が一気に進んだわけではなかった。インドネシアの事象で、私がとりわけ興味をもった反華人暴動を理解するうえで、私は分析するのに適切な時間幅の設定について、悩んでいた。カポーターが『冷血』において扱った時間軸の幅は、そう長くはなかった。回想を含めた

としても、殆どの内容が、数カ月  
のうちにまとめられる。

Arendt, Hannah. *The Origin of  
Totalitarianism*. New York:  
Schocken Books, 1951. (邦題『全  
体主義の起原』) は言わずと知れ  
た政治哲学の古典である。ナチズ  
ムやスターリニズムを例に、全体  
主義国家の思想的、歴史的背景に  
ついて考察した書である。内容的  
に、この本がどれほど凄みのある  
本かは、私が紹介するまでもない  
が、内容と同じぐらいインパクト  
があったのは、アーレントの思想  
的背景の考察手法である。とりわ  
け、どの範囲・時代の歴史を考察  
すべきかを確定させるまでの執拗  
な検証は恐ろしくもあった。アー  
レントの資料の使い方は、情報を  
重ねていくというよりは、新しい  
情報を用いて、偏見や思いこみと  
いった思考の贅肉を削いでいく、  
引き算のプロセスであった。

さらに、注釈に引用される膨大  
な資料が、私の歴史的検証の御都  
合的な詭弁あるいは誤謬を戒め  
た。私はこの時、九八年の暴力と  
同等に暴力的な事件を、歴史の中  
からつまみだして、マルクスの有  
名な句のように歴史は繰り返すと  
断じようとしていた。そんな誘惑

に対する戒めがこの本であった。  
歴史検証においては、華人暴動を  
よって見出せる原因が決定的にか  
わってしまふ。さらにいえば、三  
〇年代、六〇年代、九〇年代、と  
いったぶつ切りの時間を比較して  
必然を抽出する誘惑にも抗い難  
い。アーレントが示したように、  
連続した時間の中で比較を求め  
るといふのは、とてつもない作業  
でそもそも無理だと思っていた  
が、そんな思考力とキャパシティ  
の問題で閉じていた私の頭を開い  
てくれたのが、この『全体主義の  
起原』であった。

感化されやすい私は、現地調査  
の段階で、私はまずアーレントを  
真似て刊行物や、警察・検察の調  
査と言った一次資料調べ、資料相  
互の齟齬から切り込んでいく方法  
を目指した。加えて、カポージェ  
イのように、現地に赴き、とりわけ  
誰も聞き取りたがらない人物、誰  
も注目していない人物に、時間を  
かけて聞き取りを行うことに注力  
した。ひとつひとつの小さな問い  
をクリアしていく快感が現地調査  
中の生活を充実させたものの、迷  
いはまたすぐにやってきた。

安部公房『燃えつきた地図』(新

潮社、一九六七年)は、興信所の  
調査員である主人公「私」が失踪  
した人探しを頼まれるが、その人  
は一向に見つからず、果ては失踪  
したのは自分ではないかと我を見  
失っていく物語である。

現地調査の大半を占めたアーカ  
イブでの作業で必死に「決定的な  
文書」を探している時に、『燃え  
尽きた地図』はタイトルからして  
嫌な本であった。外国の都会で調  
査中の大学院生の不安をおおる内  
容だが、結果的には意外な形で窮  
地を救ってくれた。

アーカイブ調査で困難なのは資  
料が見つからないことより、やつ  
との思いで見つけた資料が証拠に  
なるのか、自信が得られない時で  
ある。ある日、念願が叶って未発  
見の機密文書を大量に見つけた私  
は、半ば興奮状態にあった。歴史  
調査においては、文書の有無は決  
定的である。しかも未発見の政府  
のTop Secretである。これは決定  
的証拠となると私はまず考えてい  
た。しかし、「燃え尽きた地図」  
は私の興奮に疑問を投げかけてき  
た。

結論としては、「弱い犬ほどよ  
く吠える」とでもいうように、そ  
の文書は重要でない機関による重

要でない政策だからこそ、注意を  
惹くためにTop Secretと御化粧が  
施され、繰り返し印刷、発令され  
ていた。文書の内容が繰り返され  
る、機密扱いであるというのは、  
文書が重要である確固たるサイ  
ンだと私は考えていた。「繰り返し」、  
「機密扱い」とは、実は重要では  
ない事を示すサインなのだとい  
う理解をするのは、アーカイブ調  
査する者にとって、恐ろしく逆転し  
た因果律であった。それは、研究  
の道筋を失わせるものであった。  
しかし、そう捉えれば確かに納得  
できる文書内容であった。一歩間  
違えば、重要でないことを大げ  
さに書き立ててしまうところ、こ  
の「気づき」に救われた。仮説が  
崩れ研究上の道を失っても、安部  
公房が本書中の主人公に言わしめ  
るように、「迷ってはいけない」  
ともう一度文書館に通いつづけら  
れたのは、私が文書館で小さく失  
踪していた時に読んだ、嫌なタイ  
トルのこの書のおかげである。一  
〇年は読みたたくない本であるが、  
一〇年以上にわたって感謝しつづ  
ける本でもある。

(あいざわ のぶひろ／アジア経済  
研究所 法・制度研究グループ)